

# 転勤、転職、転居に思うこと

2022年3月19日

太田隆次

第一部「転勤と転宅後の再会」、  
第二部「いにしへの転勤」、  
第三部「現代の川柳に見る転勤と引っ越し」

## 第一部 私は転勤と転宅のおかげで、関東で高津高校の人達と偶然に会えました

今月のテーマでいうと、私は転勤4回（うち3回は単身赴任）、転職3回、転宅7回で平均的には多いと思いますが、そのおかげで、50年以上も会ったことなかった高津高校の旧友たちにも偶然に再会できた喜びを書かせて頂きます。

私は1975年（昭和50年）8月に大阪から東京に転勤を命じられました。明治35年生まれの母、昭和38年生まれの小学6年生の息子と昭和40年生まれの4年生の娘と私たちと5人家族でした。借り上げ社宅は、「茅ヶ崎市東海岸南」で敷地500坪と基準以上で広過ぎるが、東京通勤には遠いので家主（朝日新聞の天声人語の元担当記者と聞きました）が、家賃を大幅にダウンしたお得な物件でした。後にも先にもこういう広い家に住んだのは生涯はじめてです。海岸も近く散歩したりして最高でした。

入居して10日ほどたった東京からの帰途の夕方、茅ヶ崎駅で名前を呼ばれて声を掛けられました。高津高校校歌作詞者で一別以来の赤井文夫さんと神奈川県立歴史博物館長でした。奇遇にお互いにびっくりしました。その後もお元気で茅ヶ崎市東海岸北にお住まいです。

子供二人は兵庫県川西市緑台小学校（転勤がなければ小豆沢さんのお子さんとニヤミス？）から神奈川県茅ヶ崎小学校に、息子は6年生で娘は4年生でそれぞれ二学期に転入学しました。横浜での2008年東京高津五期同窓会に安藤さんに誘われて、高津高校2年生1学期に一別以来、大阪からも多数参加され。多くの懐かしい方々に再会出来ました。一生の記念です。私が転勤でもし遠方に住んでいたら誘いもなく出席も出来なかったでしょうし、そのままになっていたと思います。その後、東京同窓会にお呼び頂いて、茅ヶ崎市の野口さん、八王寺市の伊藤さん、横浜市の野田さんと松原さんと長谷さんともお会いできました。

子供達は多分年代は違いますが、野口さんや長谷さんのお子さん達と同じ市内の小学校に通学していた筈です。野田さんとは8年間も同じ東急線「青葉台

駅」から通勤していたのにお互いに気が付きませんでした。そのいきさつは高津高校5期HPに「53年振りの再会」と題して共同で書きました。(交遊の広場 #170 04-09-21)

## 第二部 いにしえの転勤

### 1. 万葉集の防人の単身赴任

(万葉集から3首選びました、「万葉集原文」「万葉仮名」「読み下し文」「現代語訳」の順に紹介します。

- 1) 奈尔波都尔 余曾比余曾比豆 氣布能比夜 豆麻可良武  
美流波々奈之尔 (万葉集原文)

なにはつに よそひよそひて けふのひや いでてまからむ  
みるははなしに (万葉仮名)

何初に 装い装いて 今日の日や 出でて罷らぬ 見る母なしに  
(読み下し文)

私は、いよいよ今日、この難波津より完全武装で出航します。この晴れ姿を、故郷の母に見せたかったなあ (現代語訳)

これは相模国鎌倉郡（現：神奈川県鎌倉市&逗子市～横浜市南西部の一带）の丸子連多麻呂（まるこのむらじ たまろ）が詠んだ歌です。

相模国からはるばる難波津（現：大阪府）までやってきて、瀬戸内海経由で任地の九州まで向かうのでしょうか。

「装い装いて」とは繰り返しによって強調を表わしますが、やっとの思いで武器や鎧を揃えたのかも知れません。当時は、この費用は自前です。

そしていよいよ船に乗り、故郷の母と海を隔てて見えなくなる・・・そんな悲壮感も合わせて伝わってきます。

- 2) 和我都麻波 伊多久古非良之 乃牟美豆尔  
加其佐倍美曳豆 余尔和須良受 (万葉集原文)

わがつまは いたくこひらし のむみずに  
かごさへみえて よにわすられず (万葉仮名)

我が妻は いたく恋いらし 飲む水に

## 影(かご)さえ見えて よに忘れられず 〈現代文〉

妻があまりに恋しくて、水面に妻の面影が映るのです

- 3) 知々波々我 可之良加伎奈豆 佐久安例豆  
伊比之氣等婆是 和須礼加祢豆流 (万葉集原文)

父母(ちちはは)が 頭(かしら)搔き撫で 幸(さ)くあれと  
言いし言葉(けとば)ぜ 忘れかねつる' (万葉仮名)

父母が、子供の頃みたいに頭を撫ぜながら元気でな。きっと無事で  
帰って来いよ」と言ってくれたことが、忘れられない。(現代文)

## 2 大伴家持と菅原道真と紀貫之の地方転勤

- 2-1 大伴家持 29歳の年の天平18年〈746年〉3月、宮内少輔  
(しょうふ=律令制の省の次官)となり、同年6月には、越中守  
に任じられ、8月に着任してから、天平勝宝3年(751)7月に少  
納言となって帰京するまでの5年間、越中国に在任しました。家  
持は国守としての任を全うしたようです。万葉集に自身が詠んだ  
この別れの歌で気持ちはよく分かりますね。

しなざかる 越に五年(いつとせ) 住み住みて

立ち別れまく 惜しき夕かも

(遠く離れた越の国(越中)に五年間住み続けて、今こうして別  
れなければならないことの、なんと惜しい宵であることか)

盛大な送別会が催されたそうです。

- 2-2 菅原道真(845~903)

京都から太宰府に左遷されたことは有名ですね。

東風吹かば にはほひおこせよ梅の花、主なしとて春な忘れそ

**大宰府では、衣食もままならぬ厳しい生活を強いられながらも、皇室のご安泰と国家の平安、また自身の潔白をひたすら天に祈ながら延喜3年(903)2月25日、生涯を閉じました。**

### 2-3 紀貫之、土佐日記

5年間の任期を終えて京へ帰ることになりますが、諸々の手続きを終えて船旅につくまでのとりとめもない出来事を、「土佐日記」として当時の女性言葉で叙述しています。国司土佐守として赴任（930年～935年）

#### 【有名な土佐日記の冒頭文の現代語訳】

男もするという日記を、女の私もしてみようと思った。この年の12月21日、夜8時に出発した。その折に思いついたことを少しだけ書き留めておく。4～5年の国司の任期を終えて、いろいろな手続きをすべてし終えて辞令を受け取り、住んでいた館から出て船に乗るべき所に行った。知る人も知らない人もみな見送りにきていた。特にこの数年よく親しくしていた人とは、別れを惜しんであれこれと嘆きながら夜が更けてしまった。

現代の「見送り」があったことが分かります。

### 2-4 戦国時代の武士の転勤とは何だったか＝領主を変えること

**(神奈川県立歴史博物館が公開している古文書や書簡からの抜粋)**

**桜井武兵衛氏は、少なくとも武兵衛の父の桜井左近の代から、戦国時代の関東に覇を唱えた有力武将・小田原の北条氏に仕えていました。**

**所が豊臣秀吉により雇い主の小田原の領主が滅びると、勝手に自分の所領を上野国（現在の群馬県）内に移しました。**

## 第三部 川柳に見る現代の「転勤」「引っ越し」「転職」

「転勤」と「引っ越し」

(マルセン 2019～2020年 川柳コンテストより抜粋)

- ・家買うと いつも転勤 辞令くる！
- ・会社から たらい回しに される俺
- ・転勤は なれたものさと 寅次郎
- ・三年の 辛抱と 人事部長言い
- ・正論を 吐いて私は ドサ回り
- ・転勤で 訛り混じって 嘆く児ら
  - ・栄転と 左遷が同居して いる職場
  - ・新車 買う途端に 海外辞令
- ・引っ越し屋 ひとの秘密を 知っている
- ・引っ越し後 交番探して 道迷う
- ・新住居 引っ越したら 組当番
- ・ハゲ頭 黒髪ほとんど 引っ越して
- ・引っ越し後、あなたの部屋は 北の果て
- ・飴あげるから 遊んでと 引っ越し子
- ・三度目の 引っ越し ずっと開かぬ箱
- ・大掃除 するより引っ越し 考える
- ・引っ込しの 初日に ホームシックくる

## **転職**

**(リクナビ 2022年 転職川柳大賞より抜粋)**

- ・辞表出し 帰りに並ぶ 宝くじ
- ・面接中 流れる着メロ 我が携帯
- ・希望職 あります但し 離島です

- ・面接官 あくびで結果を 伝えるな
- ・「がんばります！！」 転職前夜に 寝言いう
- ・恋のよう 昔の職場も いとoshii
- ・返事待ち 何度もクリック 受信なし
- ・場数踏み 雑談だけが うまくなり
- ・転職は 縁談のごとし 「まだ次が」
- ・通勤の 景色が変わる 新鮮さ

以上